

令和元年6月14日現在

機関番号：62501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03210

研究課題名（和文）坤輿万国全図と国民的教養の基盤形成

研究課題名（英文）The Kunyu wanguo quantu and its impact on the early modern Japan

研究代表者

青山 宏夫（Aoyama, Hiroo）

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・教授

研究者番号：00167222

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：マテオ＝リッチが1602年に北京で作った坤輿万国全図は、近世日本の世界図作製と世界地理認識の形成に大きな影響を与えた。本研究では、近世日本において坤輿万国全図に基づいて作製された世界図を再検討した。その結果、（1）「マテオ＝リッチ系世界図」という類型の再定義、（2）原刊図1点と模写図3点の新発見、（3）諸図相互の模写関係の確定、（4）18世紀末以降においても坤輿万国全図が影響力をもったことの意義の解明などの成果をえた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近世日本における世界図を検討することは、海外との交流が著しく制限されていた時代において人びとが世界をどのように認識していたのか、またどのような世界地理認識をもって幕末の開国とその後の明治という新しい時代をむかえたのか、という問いに答えることになる。われわれの世界認識の歴史を資料に基づいて実証的に理解することは、グローバル化が進展する現代社会において、世界認識をどのように形成していくべきかを見定める基礎と指針を提供することになる。

研究成果の概要（英文）：The Kunyu wanguo quantu, which was produced by Matteo Ricci in Beijing in 1602, had great influence on making maps of the world and forming geographical knowledge of the world in the early modern Japan. This study re-examined the world maps produced based on the Kunyu wanguo quantu in the early modern Japan. The following results were obtained: 1) the redefinition of "Ricci-style world maps," 2) new discoveries of one original printing copy and three hand-drawn copies, 3) the clarification of the interrelationship among the maps of the world, 4) the reasons why the Kunyu wanguo quantu was influential in making maps of the world even after the end of eighteenth century.

研究分野：歴史地理学

キーワード：地図史 地理思想 坤輿万国全図 マテオ＝リッチ 近世 日本 世界図 世界認識

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近世日本における世界図は、仏教系世界図、南蛮系世界図、マテオ=リッチ系世界図、蘭学系世界図に大きく系統分類されている。また、これらに加えて、万国総図とその影響下にある世界図をさらに別系統に分類する見解もある(青木千枝子、海野一隆、青山宏夫)。

このうち、仏教系世界図、マテオ=リッチ系世界図、蘭学系世界図は、それぞれ後出の系統の世界図が出現してもなお作製され続け、18世紀末以降には三者が併存する状況にあったとされている。このような「併存史観」は、単線的な地図史の見方に陥ることなく、また地図の多様なあり方を許容するものであって、その有効性は失われていない。しかし、その実質的な意義を担保するためには、三者併存という事実を指摘するだけにとどまらず、それらが社会においていかなる位置づけや機能を持ち、また互いにいかなる関係にあったのかが問われなければならない。

この点では、仏教系世界図と、マテオ=リッチ系世界図あるいは蘭学系世界図との関係について、すでに多くの研究が蓄積されている(鮎沢信太郎、室賀信夫・海野一隆、船越昭生)。それによれば、仏教系世界図は、マテオ=リッチ系世界図や蘭学系世界図の出現によって、修正や融合を含む変容を遂げ、あるいは新出の世界観や宇宙観への抵抗を鮮明にした。

これに対して、マテオ=リッチ系世界図と蘭学系世界図との関係については、これまであまり言及されることはなかった。たとえば、代表的なマテオ=リッチ系世界図である地球万国山海輿地全図説については、それが出現する18世紀末という時代としては、蘭学系世界図に比べて「時代遅れ」との評価が下されるのみで、蘭学系世界図に対する主体的な地図史的意義が指摘されることはない。

本研究では、以上の問題意識のもと、マテオ=リッチ作製の世界図にもとづいて近世日本で作製された世界図を検討することによって、当時の思潮にも注意しながら、近世日本における世界図史を再考する。また、この過程で、坤輿万国全図の諸版とその模写・増補およびその影響下にある刊行図のほか、三者の世界図とは別の系統に分類されつつある万国総図やその影響下にある世界図についても検討を加えることになるが、これにより「マテオ=リッチ系世界図」という類型についても再検討する。

2. 研究の目的

1602年にイエズス会宣教師マテオ=リッチ(Matteo Ricci)が中国の北京で作製した坤輿万国全図は、ヨーロッパによる世界認識を漢字で初めて詳細に表現しに世界図であった。そのため、漢字文化圏の人々の世界認識に多大な影響を与えた。とくに、日本では、さまざまな軋轍を生みながらも、その影響力は長く持続しかつ広範に及んだ。

本研究の目的は、近世日本における坤輿万国全図の受容過程を検討し、国民的教養の基盤形成におけるその意義を追究することにある。具体的には以下の諸点について検討する。

- (1) 坤輿万国全図の原刊図と近世日本における模写図の成立過程の再検討
- (2) 「マテオ=リッチ系世界図」という類型の再検討
- (3) 「マテオ=リッチ系世界図」に分類されてきた世界図の系譜関係と受容過程の解明
- (4) 最新の蘭学系世界図が出現する18世紀末に至ってもなお坤輿万国全図が影響力を維持した理由の解明
- (5) その受容が近代社会の成立に果たした役割の解明

3. 研究の方法

坤輿万国全図の原刊図、それらの模写図、マテオ=リッチ系世界図の成立に影響のあったとされる世界図、坤輿万国全図系統の世界図等を中心に原本調査を行う。調査にあたっては、寸法の計測、図像・文字の異動や紙継ぎ・針穴の有無など、詳細な観察を行うとともに、デジタルカメラによって詳細な写真を撮影する。対象とする坤輿万国全図は縦約170cm、横約380cmという大型図であるため、デジタル撮影によって得られた画像を利用することで、世界図の詳細な検討と異なる世界図相互の比較が可能となる。また、世界図製作者、とりわけ坤輿万国全図の忠実な翻刻者である稲垣定毅に関する資料を検討し、世界図作製の背景を探る。さらに、18世紀末以降において坤輿万国全図およびその系統の世界図が普及する意義について、当時の思潮や学問動向に照らして検討するとともに、幕末における変遷とそれが近代社会に果たした役割についても考察する。

4. 研究成果

坤輿万国全図は、近世日本で作製された多くの世界図の原拠となり、仏教系世界図と蘭学系世界図にならぶ世界図の主たる系統の1つマテオ=リッチ系世界図の源流となったとされている。しかし、より新しい蘭学系世界図が出現してもなお、より古いマテオ=リッチの世界図に基づく図が、なぜ、どのように普及したのか。この点について、マテオ=リッチ系世界図という類型の見直しも含めて検討した。

マテオ=リッチが、1602年に北京において漢字で刊行した坤輿万国全図を詳細にみると、二度の改訂があり、初版、第一次改訂版、第二次改訂版があったことがわかる。このうち、日本に現存する3点(宮城県図書館、京都大学附属図書館、国立公文書館)を含めて、世界に残る原刊図はすべて第二次改訂版である。

これら日本の3点は近世日本においても確実に存在していたことから、第二次改訂版が日本に伝来したことは確実である。また、模写図1点と多くの増補模写図とが残る初版についても、近世日本伝来したと考えられる。しかし、第一次改訂版については、中国での模写図しか確認されていないことから、近世日本に伝来した可能性は低い。したがって、近世日本においては初版と第二次改訂版とが伝来し、それらの模写図や増補模写図および刊行図によって坤輿万国全図が広がったことになる。

模写図は、当時の所在地でみると、仙台を中心とする東北一帯と伊勢国に多い。前者については仙台天文学統との関係がすでに指摘されているが、後者については未検討であった。そこで、伊勢国に残る模写図について検討し、以下のような結果をえた。

これまで第二次改訂版の唯一の模写図とされてきた由良図（亀山市歴史博物館蔵）は、未発見の原刊図の模写図であること、その由良図に稲垣定毅が校訂を加えた模写図が稲垣図（津市図書館蔵）で、その校訂に利用したのが今ほともに未発見の本田図と浄明禅院図（いずれも初版増補模写図）であることがわかった。また、その浄明禅院図を模写したのが、井田図（津市図書館蔵）であることも判明した。明治末期まで松阪にあった原刊図（現、京都大学附属図書館蔵）はこれらの模写図と関係せず、伊勢国における模写図は、模写図相互の関係で広がっていったことが明らかとなった。

また、井伊家旧蔵の榊原図（彦根城博物館蔵）については、その箱裏書から津軽藩医樋口道泉の所持した模写図（道泉図）を駿府で模写した図であることがわかった。一方、榊原図には校訂の加筆が九箇所に見られるが、そのうち七箇所までが一致するのが北陸図（北陸の某家蔵）であり、彦根図、道泉図、北陸図の三者は、同一の模写系統に属することがわかった。

以上の検討により、現存する原刊図とは別のこれまで知られていなかった1点の原刊図と、3点の模写図（本田図、浄明禅院図、道泉図）とを見出すことができ、それぞれの模写図相互の関係を具体的に明らかにすることができた。これまで、近世日本において存在を確実に確認できる原刊図は限られていたが、新たに原刊図1点の存在を実証できたことの意義は大きい。また、坤輿万国全図の模写関係を具体的に実証できたことは、近世日本における坤輿万国全図の普及を考察するうえで大きな成果といえる。

一方、原刊図からの直接の模写図として、前述の由良図のほかに、蜂須賀家旧蔵の模写図（徳島大学附属図書館蔵）を新たに確定することができた。これは、現在はミネソタ大学の保管となっているが、近年まで日本に存在した新出の原刊図を、その汚損まで忠実に写している事実から判明した。原刊図から直接模写したことが確実な事例は、現在、由良図と徳島図の2点にとどまる。

このうち、徳島図については、原図となったミネソタ大学保管の原刊図とともに、直接的な模写関係にある原刊図と模写図として現存唯一の事例であり、それを提示することができた点は大きな成果である。同時に、ミネソタ大学保管の原刊図については、近年の新出図であるためその伝来が不明であったが、本研究により近世日本に確かに存在したものであることを立証した点でも国際的にインパクトをもつといえる。これらの点については英語論文により公表する予定である。

刊行図については、従来、正保2（1645）年の万国総図が嚆矢とされてきた。しかし、詳細に検討すると、同じくマテオ＝リッチの作ではあるが、それとは別の東西両半球図に基づいていることがわかる。貞享5（1688）年の万国総図も同様である。17世紀中頃から約1世紀にわたって流布するこれらの世界図は、マテオ＝リッチの系統ではあるが、坤輿万国全図の系統ではない。従来、主として坤輿万国全図が想定されていたマテオ＝リッチ系世界図という類型は、東西両半球図系の第一次マテオ＝リッチ系世界図と、坤輿万国全図系の第二次マテオ＝リッチ系世界図とに峻別すべきである。

さて、坤輿万国全図の影響が刊行図に本格的に現れるのは、18世紀末に作製された長久保赤水の地球万国山海輿地全図説である。これには重版、再刻版、さらには剽窃版などもあり、地方や庶民でも入手できたうえ、子供向けの図さえあって、社会各層に広く普及した。200年近くも前の世界図に基づく図が普及した理由について、従来は、国際情勢の緊迫化と赤水個人の名声から説明されていた。しかし、これは、「時代遅れではあるものの」という地図進歩史観を前提とした例外として説明されているに過ぎない。ここでより注目すべき点は、18世紀前半の禁書令の緩和やそれとともに蘭学の萌芽・発展、儒学の刷新などの学問の動向や社会の思潮のなかで、古典を重んじ、知の淵源として、むしろ古いことにこそ価値が見出されていたことである。前述した模写図がほとんど18世紀末以降に成立をみることも、それと無関係ではない。

これを端的に示すのが、稲垣による享和2（1802）年の坤輿全図の刊行である。同図は、複数の模写図の校合により、原典としての坤輿万国全図を忠実に翻刻することを目指したものである。しかも、地図の小型化と地名や注記の別冊化によって操作性を向上させ、さらに漢文の読み下し、地名のカナ表記、挿絵の掲載などの平易化も図っている。このような操作性や平易化に配慮した忠実な翻刻の刊行は、坤輿万国全図が古典の地位を獲得し、さらにその普及が求められていたことを意味する。

以上のように、坤輿万国全図の模写図については、原刊図からの模写はむしろ限られており、模写図から模写することがほとんどであった。その場合、地方知識人のネットワークの存在も無視できない。坤輿万国全図の普及において、原刊図にもまして、模写図がこのように写し継がれることの意義は大きい。

一方、このような模写の連鎖が続くなかで、刊行図が出現する。それを可能にしたのは、知の新規性よりも正統性を、科学主義よりも歴史主義を、革新よりも伝統を重んじる思潮であった。その結果、坤輿万国全図に淵源をもつ世界地理知識は、古典としての権威をもちつつも、同時に通俗化も図られて広く普及する。こうして、近世後期の日本において、やがて来る近代国家の国民的教養を形成する基盤が準備されることになる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

青山宏夫、地図空間と地理思想、王志宇・李建緯(主編)・蔡馨慧(編輯)『文獻・文物的詮釋與歷史記憶』逢甲大學歷史與文物研究所 (ISBN:978-986-5843-62-5), 2019年4月、演講1-演講24(招待)

青山宏夫、地図にみる日本海認識の形成、歴博、202号、2017年、15(査読無)

青山宏夫、江戸時代の世界地図、わくわく!探検れきはく 日本の歴史3 近世(国立歴史民俗博物館編)吉川弘文館、2017年、66-67(査読無)

〔学会発表〕(計 4 件)

青山宏夫、近世日本における坤輿万国全図の広がり、史学研究会大会、京都大学、2017年(招待講演)(講演要旨:『史林』101巻1号、2018年、293-295)

青山宏夫、地図空間と地理思想、第九屆臺灣古文書與歷史研究國際學術研討會(The 9th International Conference on Taiwanese Historical Documents and History)台湾・逢甲大学、2017年(招待基調講演)

青山宏夫、原本と写本の直接的関係を確定できる坤輿万国全図、人文地理学会大会、京都大学、2016年(発表要旨:『2016年人文地理学会大会研究発表要旨』、2016年、110-111)

Hiro'o Aoyama, The Impact of Ricci's World Maps on the Edo period of Japan, An international symposium "Reimagining the Globe and Cultural Exchange: From the World Maps of Ricci and Verbiest to Google Earth," the University of San Francisco, 2016 (invited). (the substance: *Reimagining the Globe and Cultural Exchange: From the World Maps of Ricci and Verbiest to Google Earth*, 2016, 112-115).

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

青山宏夫、日本海に浮かぶ謎の島、読売新聞(石川版・富山版、福井版) 2018年

青山宏夫、日本海という呼称の成立と展開、日本学術会議地球惑星科学委員会、2016年

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。